

集団づくり部会

I. 研究の概要

1. 研究課題

「集団として意欲を持って活動するためには、どのような実践や工夫を取り入れるべきか」

2. 研究内容

【研究内容1】

児童・生徒が児童会活動や生徒会活動、学校行事に意欲的に取り組むための実践と工夫(小・中)

- ①日常の児童・生徒会活動
- ②ボランティア活動
- ③集会活動
- ④学芸会・文化祭
- ⑤運動会・体育祭
- ⑥特色ある学校行事

【研究内容2】

児童・生徒が生き生きと取り組む文化的活動や遊びの工夫(小・中)

- ①遊び
- ②エンカウンター
- ③行事や集会におけるレクリエーション
- ④劇・音楽・踊りなどの表現活動

【研究内容3】

児童が生き生きと学校生活を送るための日常実践や集団活動の実践や工夫(小)

- ①日常活動(班・当番・係・音楽等)
- ②行事に向けての学級としての取組(運動会・学芸会など)
- ③リーダー・フォロアーの育成

【研究内容4】

生徒が生き生きと学校生活を送るための日常実践や集団活動の実践や工夫(中)

- ①日常活動(班・当番・係等)
- ②行事に向けての学級としての取組
- ③リーダー・フォロアーの育成
- ④学年・学級での自治的活動

3. 研究方法

(1) 交流計画

研究内容についての実践例・失敗談などを交流し、「子どもたちが生き生きと意欲を持って活動するための自主的・主体的な取組」についての研修を深める。

(2) 分科会構成

午後半日日程

北ブロック会場(江別市立野幌中学校)

南ブロック会場(北広島市立広葉中学校)

分科会

- | | |
|-------|----------------|
| 第1分科会 | 児童会・生徒会活動(小・中) |
| 第2分科会 | 遊びと文化的活動(小・中) |
| 第3分科会 | 学級づくり(小) |
| 第4分科会 | 学級づくり(中) |

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 部会役員研修会による研究経過

- 5月 6日 第1回部会役員研修会
研究計画の概要の確認
- 5月19日 第2回部会役員研修会
今年度の課題部会研究協議会の提言内容について
- 7月21日 第3回部会役員研修会
課題部会研究協議会の運営について
- 9月 6日 課題部会研究協議会
- 9月20日 第4回部会役員研修会
研究の成果・課題のまとめと次年度研究計画について
- 11月14日 第5回部会役員研修会
次年度の研究計画について

(2) 部会役員研修会での研究成果

- ・昨年度、旧「子どもの活動部会」と旧「地域・文化部会」が合わさり、「集団づくり部会」となって活動した反省点をふまえて研究内容の特性について交流し、本部会が目指す方向性を確認した。
- ・南北2会場に分かれての研究協議会運営のあり方について検討した。
- ・研究内容に適した講演会に向けて、講師の選定を行った。
- ・小グループでの交流、レポート内容の交流が活発になるような分科会運営のあり方について検討した。

2. 課題部会研究協議会での交流・協議

<p>【第1分科会】 ～児童・生徒会活動～</p>	<p>①現状と課題の全体交流とグループによるレポート交流</p> <p>まず、全体で自己紹介とレポートの概要、現在課題と感じていることを交流した。生徒数、時数が減らされていて、限られた条件の中でいかに児童・生徒の主体的な取組をつくっていくか、どうやってリーダーを育て、自主的な取組にしていってよいかなどの課題が出た。その後、小学校と中学校に分かれて、さらにレポート交流を行った。小学校グループでは、レポートを元にどのような実践がされているか交流した。中学校グループでは、レポートの中身だけでなく、先ほど出された課題を元に、主に学校祭の運営についての学校間の交流と学年委員会のあり方について話し合いが行われた。どちらのグループも、日ごろ児童・生徒に活動させるなかで教師が感じている、苦労や悩みなどを交流し、お互いにアドバイスをし合う様子が見られた。</p> 
--------------------------------------	---

【第2分科会】
～文化的活動と遊び～

②成果と課題

前年度踏襲のマンネリ化する活動については、子どもたちの経験や知識には限界があるので、教師から「こんな方法もあるよ」と提示することが必要である。また、子どもたちが自主的に活動するためには、子どもたちの想いを大切に、他の委員会と連携するなどして、教師が子どもたちとの関わりをもって活動にあたることで自主的な活動につなげていくことが話された。学校祭については、縮小する活動時間の中で、どこまで教師がかかわり、生徒主体で取り組ませるかが問題である。また、学年委員会の運営にも負担が大きくなっており、活動を精査するなど見直しが必要という課題もあげられた。

①小集団でのレポート・実践交流

各グループ6枚、20名程度になるようにグループを作り、小集団でのレポート交流、実践発表を行った。

今年度のテーマ「校外学習で盛り上がる遊びや出し物」に合わせて、バスレクで取り組める、「似顔絵リレー」や「万歩計競争」の実践や、遠足で取り組める「宇宙人おに」や「もりのさがしもの」の実践など、様々な遊びの実践発表がされた。

また、それぞれが紹介した遊びを実際に小集団で行い、楽しみながら交流する様子が見られた。



②成果と課題

レポート交流で学んだ遊びの実践は、バスレク、遠足、宿泊学習、修学旅行などですぐに生かせるものが多く、有意義であった。また、テーマを絞り、小集団で交流することで、実際に遊びを行う等、活動的に交流することができた。

一方、レポート交流の時間が短くなってしまい、十分な交流ができなかったグループがあったり、スペースが少なく、動きづらいグループがあったりするなど、課題もあった。形式、時間配分や場所などは対策を検討していく必要がある。

【第3分科会】
～学級づくり(小)～

①小集団でのレポート・実践交流

『日常活動』

- ・ルール徹底…みんなが気持ちよく過ごせるように、5つのしてはいけないこと（危険・迷惑・ずるい・失礼・だらしない）を掲示
- ・返事…返事をする意味（言ったことの確認・わかったという反応）を考えさせている。
- ・係活動…毎日複数でできる活動。2か月に一回じゃんけんで決める。
- ・当番…班ごと。4人くらいで一つの仕事をする。

当番活動（給食や清掃指導のやり方）を教えシステム化する。また、誰が何をするのかを明確にするための当番表を作り、責任感を育てる。

⇒華々しい活躍の場はなくとも、一人ひとり輝く場を設けることを意識している。子どもたちが自分のことを自分でできるようになる。

『行事に向けて学級としての取組』

- ・音読や暗唱・・・「声を出すことで集団づくりを行っていこう」という目標のもと行っている取組。学年ごとに詩で音読や暗唱の取組を行い、集会で発表している。

⇒ただ読ませるだけではなく目的意識を持って読ませているので、子どもたちの様子に変化してきている。また、詩を書く子も増えた。学芸発表会等の人前で大きな声で発表する機会でも堂々とした発表に繋がっていく。

『リーダー・フォロアーの育成』

- ・クラス会議・・・投書箱の手紙について、テーマを選んで会議する。(議長は固定、児童が司会)

⇒一人ひとりが意見を出せる。反対意見が出て否定された気持ちにならず、所属意識を持てる。

『その他の実践』

- ・席替え・・・担任が決める。支援が必要な子は教室の端の方。
- ・保護者と連携・・・学級通信・宿題を通して保護者に協力を求める。宿題の内容は「時間割を調べてランドセルに入れる」「カッパを着る」「ふきん絞り・テーブル拭き」など。(入学時の能力ギャップを埋めるため)

⇒子どもたちの実態を把握し、それに適した支援を行うことで子どもたちに必要以上の負担や不安を感じさせない。「できた！」の積み重ねで安心感が持てる。

②成果と課題

様々な集団づくりの実践の交流がなされ、お互いに良い刺激となった。よりよい集団に向けての取り組み方は多様であるが、①児童が楽しいと感じられる、②安心感から自分を高めていける、といった共通する視点に立った集団づくりを目指すべきであるということが確認できた。



一方、児童の自主性、自立性を高めるためには、いつまでも教師が主体となるだけではなく、児童が主体となって集団をつくる機会の確保も必要である。そのため教師は、低学年から中学年へ、中学年から高学年へとつげなる意識を持ち、少しずつ学級づくりの主体を教師から児童へと移していく工夫が必要である。

【第4分科会】
～学級づくり(中)～

①小集団でのレポート・実践交流

『日常活動』

- ・学級通信・・・生徒が書いた文章を学級通信に載せ、朝・帰りの会に発表する。
- ・スピーチ、ニュース発表・・・人前で話すのが苦手な子が増えているため。
⇒人間関係作りが苦手な生徒が多いため、互いの気持ちを通じ合わせ、思いを伝え合う人間関係づくりの『場』を設定している。
- ・係と委員の連動・・・自分の仕事に対する意識を高め、責任感を育てる。
- ・1人1係・・・生活班と係を連動させず、1人1係で学級に所属意識をもたせる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3分前学習…係で点検しつつ、学級全体で学習に向けた雰囲気をつくる。 ・ Q-Uを利用した学級経営…担任が学級の実態を把握し、手立てを打つのに適している。学級の様子を客観的に捉えられる。 <p>『リーダー・フォロアーの育成』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ リーダー・フォロアーの指導…リーダーを定期的を集めて活動の確認、良悪を教師が判断。口出しし過ぎない。リーダーのフォローを教師がする。リーダーも自信が持てるように。フォロアーのやる気を引き起こす。 <p>『学年・学級での自治活動』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 班長、日直…続けることで生徒たちは、「この人がリーダー」という意識が生まれ、協力的な態度をとるようになる。 <p>『その他の実践』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 班日誌、個人ファイル…毎日全員が本音で書いてもらうようにしている。教師も毎日コメントする。そうすることで、学級の雰囲気が良くなり、発言も増えた。 <p>②成果と課題</p> <p>レポートのテーマについて、それぞれの学校実践を交流することができ、今後の学級経営のヒントを得ることができた。それぞれの学校の特色や、何に重点をおいた指導を行っているのかで取組に違いがあるように感じられる。しかし、「どのようにして生徒の考えや思いを引き出し、お互いに交流させていくべきか」ということを中心的な課題としてとらえ、取り組んでいる点においては各校ともに共通しているようだ。</p> <p>自主的な集団づくりに向けて、活発な意見交換を行わせたい。そのために自分の意見や考え方を持つことや、それを伝えた際に受け入れてもらえるという安心感のある学級を目指すために、生徒の実態にあったものを考え、取り組んでいくことが必要である。</p>
--	---

Ⅲ. 講演会（実技・理論研修会）

【北ブロック】「リトミック講演会」

講師：武井 歌織 氏(リトミック研究センター札幌第一支局長)

①講演会の様子

リトミックを体験するために、まず、講師のピアノ演奏のリズムに合わせて歩いたり、スキップをしたり、走ったりして全身で音楽を感じて表現することから始まった。「歌を歌う」「手をたたく」「手足を動かす」「声を出す」など表現方法が多様であるとともに、「個人で」「ペアで」「グループで」など交流の形態も様々で、約1時間の講習に飽きることなく取り組むことができた。初めは身体表現に恥ずかしさを感じていた部会員も、次第に夢中になって汗を流しながら体を動かし、笑顔や歓声があふれる楽しい時間を共有できた。



②成果と課題

講習内容は、誰でも簡単に実践できるものばかりで、音楽・体育の授業や学級作りなどにすぐに生かせそうだという声が部会員から多く聞かれた。また、それらを実際に体験したことがとても有意義であった。講師からは、「この動きで曲が何拍子なのかを意識することができます」「音の強弱を感じてください」など、動きと音楽のつながりも

教えていただき、学びながら音楽や身体表現の楽しさを存分に味わうことができた。

一方で、部会員が活動している際に講師から指示が出て、声が聞こえにくかったことや、曲のリストや資料などがなく、講習内容を実践するには記憶に頼るしかないこと、中学校には不向きな内容であったことが課題としてあげられる。

【南ブロック】「チームを輝かせる～先生が元氣アップする大作戦～」

講師：塩谷 隆治 氏（笑華尊塾 代表）

①講演会の様子

集団として輝くチーム（学級）をつくるためには、教師が元氣に実践しているかが重要であるという考えのもと、講演が進められた。教師の心と体を良い状態にするために、①HT（＝ハイタッチ）⇒1日の始まりは元氣なあいさつから！ ②イライラ対策⇒体を動かすことでイライラのエネルギーを消費する。時には怒る自分を許す。③「疲れない体をゲット」⇒リフレーミング（疲れている＝充実している）で脳にダメージを与えない。という3つの秘訣を紹介、会場全体で実践し、チームづくりに欠かせない元氣と明るさの大切さを実感することができた。

②成果と課題

講演の内容、そして講師の軽快なトークと実践から、「元氣をもらった！」という声が部会員から多く聞かれた。そのことが講師のテーマとしていた内容の実感をともなった理解につながったようである。また、講師が資料の提供に快く応じてくれたため、自校での研修などにもそのまま生かすことのできるものであった。

一方、講師の話は何度か聞いており、ちがう内容の話聞くことができたよかったという意見もあった。すべての部会員が充実した時間を過ごすことができるように、時間配分や運営の方法を工夫していくことが必要である。



IV. 部会研究の成果と課題

1. 成果

- 研究内容やレポートの書式などを部会便りで提示し、部会員への周知に務め、レポートや実践をもとに活発に意見を交換することができた。
- 小グループ交流では、他校の取組を聞くことができ、今後の指導に役立つような話し合いの場とすることができた。また、自校の成果と課題を明確にすることができた。
- 各分科会の小グループを小中合同とすることで、人数不足の解消だけでなく、異校種の取り組みも交流でき、よい刺激となった。
- よりよい集団づくりに向けて、発達段階に応じ、教師主体から児童・生徒が主体となって活動していけるような指導方法の工夫が必要であるという共通理解が得られた。

2. 課題

- 様々な活動を児童・生徒にさせるための時間の確保、教師による準備の時間、フォローの体制などに限りがあり、活動の精選をしなければならぬ。
- 児童・生徒の力量に合わせて、教師側がやらせたいことと、児童・生徒がやりたいことのバランスを考えて活動を行う必要がある。
- 講師の話は何度か聞いており、ちがう内容の話聞くことができたよかったという意見もあった。また、レポートの帳合作業に時間がかかり、レポート・実践交流の時間が十分でないと感じる部会員もいた。多くの部会員にとって充実した時間となるようスムーズな運営方法を検討し、改善していきたい。

（文責 田邊 いづみ、小野寺 海人）